筑前國續 風土 記 卷之十 目

上座郡

惠 林 宗 長 鏡 須 麻氏良山麻氐良 阿蘇 山 黑 朝倉橘廣庭宮 中 蘇 坊 川 田 珠 王 八 明 幡 寺 祉 淵 村 山 谷 村 石 野 志 古 鳥 皷 赤 比 入 湯 千 穗 佐 小 御 齊明天皇 田大行事社 波狐原窟屋 良 石 年 御陵 谷 原 川 原 賀 地 院 隈 村 坂 松 金普烏門 花 脳 園 邶 上 野 池 久 大 南 小 朝 兄 山正金寺址 手八 喜 倉 園 林 邊 弟 宮 庭 瀧 井 幡 田 田 山

砥 俊寬僧都墓 尾永村十三塚 帝 林田村神社 栗尾大明神 白鳥村富永村 久保川 一城渡 釋寺嶺 座郡 有 堤村 大堤 十三塚 桑原村十三塚 對 小 鬼 **貴野大明神** 合 隈面田 村 所 原 釜

長

田

村

禮

村

矢

村

るす

塚

輔

奈木

園

村

前國續風土記 卷之十

貝原篤信選定

竹田定直校正貝原好古編錄

上座郡

質質に 出 田 地 此 竹野雨郡に隣り、 なり。 なり、 郡 楮皮 黒川、 さか して は筑前の東南の隅にありて、 大河流れて魚鼈多く産す。 して非薄ならず。 ひ、 土産の多き事も國中第一 西は下 朝くらと稱す。然れば兩郡をすべて朝倉と云なるべし。順倭名抄に、上座を、かみつ朝くらと訓し、下座を、しもつ 赤谷. 種植の利他所に倍せり。 紙を上の新 北は楼須郡につ 座につらなれり。 小石原など、深山幽谷多く、美材をこん。 問に千年川をへだつ。 麻組とす。 凡此郡に深山多き事國 ル き な 最上郡なり。 國中第一の膏腴 南は筑後の生葉、 **b** 福井、資珠山、佐 銀杏多し。 山を隔て嘉摩 東は豊後豊 郡 民 俗

牧なり。 **莴野手** 大竹 三光鳥 大 八芋須川に多 蕨粉 川鳥 粟 椎茸 蒟蒻 牛蒡 油菜 枳根は 羚羊寶珠山にあ 班竹福井 紅花 伏苓 材木 漆 大山 河鯉 大栗 鮹 茜ななな 創 魚 大杉 陶器中野 牧馬

上座下座の内、粟を多くうふ。 油菜是につぎ、紅

等也。

花又是につぐ。

和名抄に載る所此郡の郷の名七あり 長新壬¹¹ 把¹² 島と淵を生べ 伎き 池田、穂坂、久喜宮などを、今も把伎郷といふ。池田の枝村に把伎といふ所あり。又休田、星丸

廣な 祚

田

束

何

のこれり。

大智 庭 村

今稱する

所

0)

村の

名

凡三十三村

石

成

村

三き

大庭村 魔す。 大庭村に

米

持

村

同上

塚 村 之大 内庭村 同上

守 村 寺 村 村之内

松 輝寺村 木 村 柯 長 淵 村 中 地 村 町 同上

座 之入 内地

宮 野 村 F 比良 松 H 古は平松町といる宮野村之内 ふ、

拜 塚 叉 村 村 之 冷 集院村 同上 八 坂 村 同 比良松村

田 中 村 上 寺 村 田 尻

村

陽す。 は寺村に

中古毛村 た いれ村 之古 内毛 村

古

毛势

村

國

村

古毛村 同 上 才 慧 村 同上 中 島 村

後か 島 長 村同上 須す 川 村費は管生とかく。

長安寺村 山 村 之須 內川村 朝陽寺と云をよしと同上 す。 來向寺村 威德寺村 同上 同上

村 惠 蘇 宿 之山 內田 村

山

田

皆平 以 上十五村 外 原の地 隈 村 12 は 同上 あ 上座 50 の下郷 菱 下鄉 野 は とい 村 南 は ኢ 山 0 田村を以かぎりと 山 窪 田村 自 t 村 þ 之菱 北 內野 は 村

北は

大庭鳥集院を以限

とす。

久 喜 宮 村 赤 福 黑 木地屋 寒衰志 高 志 **外喜宫町** 鍛冶屋村 藪 佛 小 西 鵜 大 河內村 Ĵij 谷 井 波 原 山 谷 山 木 村 村 村 村 村 村 村 村 村 村 村 村 之松 內末 同 之志 上 内波 村 同上 之佐 内田 村 同上 同上 同上 同上 同上 村の内にあり。久喜宮、若市兩 米à上 哭を林 坂が田 疣は 星 黑 白 瀨 古 林 佐 道日木村 代だ福井 目 戶 木 九 松 田 町 村 村 村 村 村 村 村 村 村 之 内 客 宮 村 同 之黑 上 內川 村 **勝す。**村に 之福 四井 村 同上 谷村といふる 同上 属す。福井村に 同上 松。 古 鄉 拜がみょう 松か 世 宫 穗 若 石 川 田 加田 C 末点 詰 坂 賀 原 市 村 村 村 村 村 村 村 村 村 村 之星 兩林 之林 內丸村田 內田 村之星 內丸 同上 同上 同 上 同上

資 珠 Щ 村 朴 同上 合だ 仓 剛野村 村 之實に實 内珠属は 山村 村。村

き所、 以上は上 は志波を以限とす。 資家谷村 あ 塔 屋 h 湘 名乘關 座 村 村 奥は小石 の 同上 同上 同上 上郷紫 の あ 小石原村 原 b ٤ 池 松 山田村 いふ。 田 福井、 處 村 朴 是上鄉下 志波村よ 同上 **惠蘇宿山下** 資珠山を以 竹 把" り南 鄉 木き 畑 0) 村 村 境 の河 限 は 村 ٤ Ш 同上 之池 之小 村石 謚 谷 **b** 0 内田 せば 村 原村 の 中 口

以上九十四村

〇麻 氏 良 山 麻氐良里人は 内 二十二 枝村

內 諸 此 は 座 山 郡麻氐良布神社小一座とあり。 伊弉諾尊 山より は ろ 麻 ılı 跃良 最高く、 田、菱野の東、志波村の西北にあり。 な H ŋ 0 0 上にあり。南に向へり。祭る所 其形うるは H 神 月神、 し。延喜式神名帳に、 素盞嗚尊、 此社は山田村 蛭兒をも 此 0 の 邊の 神 上

良布神 を下 祭り 弉諾 あ 民 とは 資幣をさゝげ 陽成天皇元慶元年九月廿五日、 を左右良の山上に改め作りしにや。朝倉の宮の 日 明天皇筑紫に下りたまひ、朝倉の廣庭の行宮で立た 相 殿に配け あ 9 本紀に見えたり。 いへり。 いまだ其是非をしらず。宮所は古來今の所 50 授らる。 時 尊 左右良山まで間近け 本ると云。 Ç に從五位上を授 此左右良布 し 朝倉 然ればいにしへは、 齋明天皇、 し祭り奉る。 此 社に 同 天文四年、 し寄進狀等の猶こ 0 社 四年六月三日正五位上を授け 此山、西峯老人が曰、筑前 敷地の産子はなし。三代實錄 の木を切し故、神 の神社なるべし。今案ずる 此時行宮を立んとて、 天智大皇、 く。同三年九月七日に 大宰大貳大內伊豫介 說 れば、さもあるべし。され 朝廷よ 伊 明日香皇子舞のあすかの 特册等 筑前國從五位下眞天 90 の祟 9 b 也。 殊 図 ŋ 12 朝倉 あ 朝倉神 相 正五位 御尊崇 也 に、 殿 9 あ زن E 祉 ٤ 伊 沚. を

〇志 波 把货市

りし故に名付くと云。志波に町あり。豐後日 此事池田村の所に詳にしるす。 十二里あり。志波の町に毎年二月廿七日より市たつ。 に千年川あり。 むかし此所を遠市の里と云。後代に志波氏の人居た る驛路也。 本村もあり。うしろに左右良山あ 偏土には希有なる佳境也。 脳 岡より 60 [in] へ通 Hij

置せり。 と云。 せ 圓清寺曹洞宗 普門院眞言宗 黒田氏を藤原氏とす。誤なり。佛殿の本尊觀音は金鳥 田長政の家臣栗山備後利安、 からずと雖も、 **b** 自称 而觀音也。行基の作といひ傳へたら。此寺の 如水公の位牌及畵像あり。 せられし故、山號寺號とす。 如水の追號を龍光院といふ。 如水の事を記せし文あり。 是又志波村にあり。龍光山と號す。 廣大山と號す。志波村にあり。 其營作の精巧なる事、國中第一 如水の爲に此寺を創立 長政の位牌をも安 開山 かけ物とせり 別號を順清居士 には第翁 本貸十 佛堂廣 也 和 尙 黑

天王の 山 に在 し佛にて、 あ 5, 佛師法元が作といふ。 叉同作 0) 四

狐原 南にむか 0 簄 へり。 屋 志波村の境内にあり。大なる窟屋なり

跡あ 旗下也。或時豐後に往んとて、志波村の香山淵の邊云人創立せり。此人筑後國の三原を領して、大友氏の は、 を通 三原氏是を感じて、我罪ふかき事をみづから悔て り手だれなりければ、あやまたず射殺。取あげ 金烏山集雲菴址 たちょち出家し、 其淵にう 三原に歸る時、又香山淵の側を通る時、 れば、首を射切て軀ばかり也。 二其淵に游泳しを、三原氏弓を以雄を射る。 其雌の翅 り。開山は無方和尚と云。此寺は三原彈正貞吉 りしに、其時は此淵深かりしが、折節鴛鴦雌雄 かぶを見て、又弓にて射殺しぬ。取上て見れ の内に、去比射切たる雄の首を挟めり。 志波村の内、鳥山と云所に禪寺の 三箇所に寺ヶ創立す。 其後豐後に逗留 此集雲菴及 鴛鴦の雌 T b 見 よ け

し 跡に立し寺也といへり。 るに、 卷に の前大道の側に、昔年大なる楠ありき。此楠の根盤十圍りね。又志波村香山と云所の畠の中に鼈塚あり。香山 見 佐倉に鴛鴦寺と云寺あり。 り。今も其所南山と云。寺はなくして跡のみ殘れ 當郡穂坂村の園山正金寺、筑後の南山、 なさけをしらざりし事を悔耻て、忽かみをそり りを通りけるに、おしのめとりを又射けるが、 る 又近比丸鑑と云草紙ありて印行せり。 圓清寺に移して今にあり。篤信案ずるに、沙石集第八 かる びあり。 れば、其鳥の翅の下に、去年射たり 。又志波村香山と云所の畠 みな禪寺なり。此集雲菴の本質觀音をは、此村 其くびはきれて見えず。 鴛の夢に見えし事をしるせり。此事に似たり。 池のほとりに一字を結びしが、 し鳥二すみけるを、 彼狩人、 我がよしなきわざをして、 是也。 此事同じければ爱に記 然れども三寺共に今はな 狩人池のほとりを通 雄鳥を射ころして 其翌年又彼池のほ 其書に下總 お にあり。今は其竹野郡上森山村 鴛鴦寺は其 の雄 し、侍 T 物 取 取 りけ 僧 7 巡 け

浸る程 で行程 山 水 あ か と成ね、近き比是若市村其外所 株今猶存せり。なるべし。其根に ば 入 P T 邊 辨 遪 ば b 饗を催して大膳を請じけるに 忠之公 の すやう 、洪水出て、 嶺より、 n またず鼈に 打ける。 の石の上に、大鼈背を曝して在けるを見て、 、大膳彼所に赴かん 十 ず、 Ų 民屋悉破壞 に成けれ 六月中 町許 へをはならけれる所ありしを の家老栗山大膳、志波村 の事なれども、土地の變易かくの如し。々より流れ出る水の落合し所なり。今は 降 時 の 黑 大膳もとより鐵砲の上手なりし 其下に香山 所を、 路上に て ば ば 雲 旬極 あ か 72 れば、其樹焚ける、延寶七年の比、 片立 て、 る。 þ 白 先 めて晴天 晝暗 L 獈 カっ へ行事成 とて、此淵 又動目來 淵 5 のぼ 鼈 n 夜 5 とて、 0) じ 忽大膳 る な 間 る。樟腦ある故に能燒、乞人其空洞の内に宿 難 ٤ 如 T は þ 大な 及 馳著け に居 見えて、 < カっ 0 其宅池田 り飛あ 邊で通 が、 山 び i: が乗たる **人喜客** ょ な 12 る長 り二室 雨 þ 9 志 9 俄 波邑 0 淵 カゔ 村 9 田 寛永の 物 12 0) カキ 雨 1. 盱 h 宿 ば 在 三嵐 鐵 から زن T 砲 0 ż 猶 舄 棩

天神 其外田 に納 石ば 間 大なる山櫻の き一時の僻事によりて、邑人許多の禍を貽しける 云所に流寄ける。彼靈右のごとくの祟をなせりとて、 物し居たりと云。大鼈は數日を經て、 のづから其靈異ある事、古今ためし多し。大膳よしな 村人等其からを取あげ、干部經讀誦執行して、 の の大木也。 るがごと るまでにて、彼邑人多く川端に出、 には 大木拔て流出る。 めけるとなん。誠に群に超たる魁偉の物には、 びこれ りの し 志波村の東南にある小祠なり。 田 K **b** 甚賞翫するに堪たり。 川に成し所夥し。上座郡中に 樹あり。其高さ七間、其枝繁茂し 地川と成 花盛にひらくる時は、 雪の 香山淵も此時埋れて陸 a a 筑後の方には小雨 此方の大雨 他方には未曾有 筑後の瀬下と 此 て、 となり、 つもれ T 少降た 0) 方七 を見 側に 此 三千 所

O黑蘇八幡宮

田村にあり。 **社家の說に云傳ふるは、** 齋明天皇異

引て、 郡 台宗 田 儀式も今は絕ぬ。社僧の寺を朝倉山長安寺と云。 取 輿を休めし所とて、猶大木二本殘れり。又十一月十五 道 此 國 日は河貝子祭りと號して、長淵村蜷出池よりみな で神幸の儀あり。古毛村の内おべた森と云所に、 皇を合せ祭りて三座とす。第三應神天皇。第二齊 の惣社也。 の古江、 上て土器に入、 ł: 'n なり。 樋より水を通し、 側 軍勢を遣 30 横三間に長九間の樋をかけ、其上に土手を 72 なる小高き所にありて、角に向へり。上座 勸請し給ふ。 n 寛文三年より初れ 城力、 朝闇寺なるべ めぐりやむ時本殿に奉る事あり。 九月十五日祭あり。 したまふ時、 長淵、 凡九箇村、百五十町餘の圃、皆田と 神前に備ふ。 白鳳年中に、 圃にそゝぎて田とす。 古毛 上大庭、下大庭、入地、 し 祈 此社の前千年川 願 蜷はひ出て土器 b の為に にしへは長淵村ま 齋明天皇と天智天 八幡 川 御 大神を カ> 下座 水 蜷二 社は 郡 7 天 榊 中

〇鷺明天皇御陵

陵あ 郡 **b** 12 御の後、天皇の喪海につきて、大和國飛鳥 **猾今に長門國豊浦宮にも、** は齋明天皇の御陵と云。 き侍 田 北 þ た か よし、 殯 越智岡上陵に葬り奉るよし見え侍れば、爰には な 0) の め し置奉 所なる る 此所も又、 30 话 らず カコ 幡宮の べからず。然れども、仲哀天皇を長門國豊浦宮 とり h は世に猶多し。 日本紀に見えたり。 ほ 故、 5 、秋の田と云田あり。是天智天皇 の庵と詠たじまへる 上なる山の側に、 **へ** ども 齋明天皇の御屍をしばらく 其御しるしを殘 後に河内國長野に葬り 惠蘇の宿と志波 里人の説にまかせ、 齋明天皇は朝倉 仲哀天皇の 延喜式に、 まるき石塔在。 所也~云。 ける にや。 奉 御陵山と との b. 川原に の宮に 大和國高市 の 間、 殯 其說 し置 カッ 里人 殯 て崩 共 秋 道 T 72 > る 御 あ

〇朝 倉 關

b • h 朝倉の宮木の丸殿の皇居在し時、北には苅萱の關 山田村に黒蘇宿とて小邑あり。 たまひしなるべし。 し所也と云傳ふ。又名乘の關とも云。須川の邊に、 南には此朝倉の關ありて、 非常をいましめさせ 此所則朝倉の關の あ

小 侍 從

類聚 名のりして変ふかくすぎぬ郭公

われをゆるさぬ朝くらのせき

名いらざりしものをば通さぃ 又此黒蘇町の邊に隱家の森とてあり。是は此關にて、 れぬるよしいひ傳たり。 りける故、此森にか

〇朝倉橘廣庭宮

けづらざる黒木にて、屋作りさせ給ひし故に、木の丸 づから筑紫に下り、此所に行宮をたてつすみたまふ。 齋明天皇六年、新羅より百濟を責ぐつがへしける故、 殿とも云。其かり宮のあと、須川村の圃の中にあり。 日本より救ひの兵をつかはさんため、翌七年天皇み

るべし。 むか 世わ 殘れ 圃 是 叉此 るべ を立べき平原の地此外になければ、 て おは 也。 に、清 |人も齎| して、宮野といへるも、是によりて 村に宮野村あり。 朝 のさはりになればとて取捨侍る。 廣庭とも **b** し。 て、筑前國朝倉と云所に、山中に黒木の屋 所の北近き所に朝闇寺とて、 かれ二村となれり。 し朝闇寺と云し寺あり。 用心をしたまひければ、 しましけるを、木の丸殿と云。丸木に らの地に立し寺なるゆへ、 輔奥儀抄に云、天智天皇世に 是又此地を朝倉と云し一證 花 明 むかしは礎石など多 園 天皇行宮の跡と云。 山猿澤池などいへる舊址 いひつべき所なり。 ئۇ かしは此兩村 此所齋明帝の行宮の在 今も其跡いち く殘りて 其南 入來る人、 須川の枝 此 朝闇寺 村民の の方廣原 つゝみ の名 數 とすべ さ ___ ものこ あり れど 村 なりし なるべ \ddot{o} ٤ る今猶 説さ し じる しを、 T rj 村 內 72 作 まるる カゞ 0)h を作 あ b **b** し。 b 按ず 皇居 地 る な あ 近 る 田 h

事質 名 らし。とりわき須川、宮野の迄を朝倉と稱せしにや。 訓すれば、此郡幷下座郡をも、すべて朝倉と云 鹽草等にも. 皆朝倉木の丸殿筑前國にありとす。故に まひ、敷の兵を出さんとし給ふ。此時天智天皇は、皇 使を日本に遣はして敷をこふ。天皇筑紫に行幸した 定方と云し人、新羅の軍を率ひて百濟をうつ。 備中國風土記を引て曰、皇極天皇六年、大唐 又本朝文粹第二卷、三善淸行意見封事を考ふるに 抄には、かみつ朝倉と訓し。 近代の人の集めたる名寄歌枕等にも、 夫善相公は博覧の人也。又意見封事は天子へ奉れる 太子にておはしましけるが、攝政して天子にしたが たまひ、終に此軍をやりたまはざりしよししるせり。 ひ行たまふ。 دں 也。 りをしつゝいりけるなりと書り。 聊たがひ有べからず。 風土記は元明天皇の勅書なり。此二書は其 其後皇極天皇は、筑前の行宮にて崩じ 且义八雲御抄、十訓抄、藻 下座を、しもつ 皆是にしたが 上座を順和名 朝 の將軍蘇 け < 百濟 るな 5

を迎 は たり そかに日本紀をかんがふるに、 あやまりて筑紫にありといへりと書たまふ。 風土記にも、 年新羅より百濟を傾くつがへし、 しけるにや。朝倉の木の丸殿は土佐國にあるを、古來 福信が乞所の意に任せて、 よりさき、日本に人質として獻也し白濟の王子豐璋 れとなる。百濟の福信が使來りて救の兵をこひ、且是 百濟に遣はさんとおぼして、先難波の宮に幸し へり。然るに一 船西に行 んとて、 いたり、)ų 延喜式神名帳に、土佐國土佐郡にありと記せり。 諸 へ取て、百濟の王とせんとこふ。十二月・ の軍器を備ふ。 國の内なれば、伊豫國より土佐國 きて、 駿河國にて船を造らせらる。七年正月、 庚戌、 土佐國朝倉の郷に朝倉の社ありと見え 條の兼良公の梁歴恩抄に日、朝倉の社 始て海路に 伊豫のにぎ田津の石湯のか 今年百濟 筑紫に幸して、 つ 鷲明天皇皇極天皇の の 甲辰、 君臣すべてとらは 12 めに新羅をうた 御船 へ移ましま 救 篤信 ġ の軍 天皇 宮に 伯命 御

し 癸卯、天皇遷て朝倉橋の廣庭の宮に居たまふ。 につく。十一月、天皇の喪を以、飛鳥川原に殯 宮に崩じたまふ。八月に皇太子、天皇の喪をう 百濟を救はんために、筑紫へ下り給ふ道なれば、 奉て、磐瀬の宮に至り給ふ。冬十月、天皇の喪歸で称 は太子にて供奉したまへり。七月:齋明天皇朝倉 の社の木をきりはらひて行宮を作る。此時天智天皇 せり。日本紀の文かくのごとし。今按ずるに、 るがごとし。新羅の兵唐の人をかたらひて、百濟をせ 人質として來り居られしかば、齋明天皇其飢 日本にしたがひし國にて、王子豐璋も、かねて日本に んと思し召、兵船を作らせ軍兵を催し、 の行宮に居給ふ。天皇是を改て長津といふ。 百濟の君臣皆とらはれとなる。 **今攝津國より筑紫へ下る人、かならず伊豫を通** 海邊に、しばらくといまりたまふ事、さもあるべ 三月庚申、 御船還で于娜大津にいたり、 百濟はもとよ 御みづから のと記 天皇 朝倉 莊 伊

豫岬をめぐる 經伊豫 座に、 れも有 筑 續 也。 佐へ 遠 也。 南にありて、筑紫へ行道筋よりは、 留め 往還甚易。 は を救んとて、其おもんぱかりいとなみも、い うもなし。 日本紀、 紫 は き土佐國に朝倉の宮を立、かしこに久しく しき時なるに、かゝる難所を經て、何の要用もなき ゆく道の難所なる證とすべし。海をまはれば、 其上伊豫より土佐へゆくに へ下り、 天皇多くの軍兵をつれて筑紫に下り玉ひ、百濟 72 國。 Ŋ 朝倉廣庭の宮を立て住給へり。 は め、 べければ、 ん事、 元正天皇養老二年。土佐國公私使。 りていよく 就此國以爲通路許之。 行程迂遠。山谷險難。但阿波國境土相續 殊にたしかなるあまたの古書に載る所、 博多の 人しく留りたまひて、 理のなき所なれば、 海邊は、不意に異賊襲來の わざと海邊遠 遠く、 は、路遠く山けはし。 ことに舟路あ 是 < はるか 此事あ へた 軍の命をも下 叉 土佐は四 伊豫より土 > þ るべ なる偏土 といそ しき所 ナと 鳳駕を 其道 國 おそ きや 上 伊

肥前の名護屋に城を築かしめ給へるがごとし。筑紫 がふべきにあらず。彙良公は四國及筑紫の地理を見 何 給はんと也。たとへば豐臣太閤の朝鮮をうたんとて、 愚抄に、朝倉木の丸殿土佐にありと決定して、書給へ 給はず、其時の急なる事勢を考へ給はずして、 給ふ事、前に筑紫に幸して、救の軍を百濟に遣はさん 木をきりて、宮を作らしめたまひしは、久しく爱に居 を、かみつ朝倉しもつ朝倉と訓せしかば、此兩郡をあ 紫朝倉なる事うたがひなし。此須川、宮野雨村のほ るなるべし。五月に朝倉の宮にうつり、朝倉の趾の けしも、むかしは須川、宮野一村にて、行宮の在し故 とりに、 いにしへより此よしを語り傳ふ。其所を宮野と名づ 朝倉に行宮を立、七月崩御の時迄久しくこゝに居 おぼしける御志によくあへり。是を以て見れば、筑 れも朝倉の宮は筑紫にあるよし見え侍れば、 まさしく齋明天皇の行宮の跡あり。土民も 上にも云し如く、 順和名抄に、上座 うた 梁塵

て、 上座 磐瀬 さく またの古人の説、あやまりにあらざることをしるべ 人は、風土記、本朝文粹、八雲御抄、 古人の 説多 くして、今もその 舊跡分明 なれば、 もあることめつらしからず。土佐に朝倉の社あ 式神名帳に出たり。 馬驛のよし、延喜式二十八卷に見え侍る。 たがはんや。朝倉の宮木の丸殿は、筑紫にあるよし、 にあるの證とすべし。土佐にも又朝倉の社あり。延喜 たがふべからず。 なんぞ筑紫に朝倉ありといへる古來の諸説をう 朝倉の宮へ往來の道なれば、是又朝倉の宮筑 らと云事分明也。又齋明天皇のといまり と云所も、筑前遠賀の郡の内にあり。いにしへの 日本紀の文の本末を能く考へ見ん 同名の地・ 同名の社、いづくに 奥儀抄等、 難 給ひし 波よ あ う 削 b

朝倉や木の九殿に我をれば梁塵秘抄 奥儀抄 新古令 名のりをしつゝ行はたが子ぞ 天 智 天 皇

俊

賴

橋の木の丸殿にかほる香は堀川百

とはぬに名乗物にぞありけ

西園寺入道公繼

千五日 ゝぎす木の丸殿の雲井まで

朝くら山のおもひ出のこゑ

雅

經

朝倉や木の九殿に誰とへば

同

秋をも名のる荻のうは風

たづらに何か名のりそ朝倉や知

木の丸殿ぞおいぬものゆゑ

たづらに浪にゆらる 1なのりその

同

木の丸殿にいかでうゑまし

が、川舎山のようにつよう。源

ゝろざし朝倉山のまろとのは

1

信

仲

親

隆

朝倉やとはぬに名のるほとゝぎす

木の丸殿に名をたてじとや

後

息

羽

院

朝倉や木の丸殿にすむ月の

光も名のるこゝちこそすれ

土 御 門

院

時しもに鳥ぞ啼なる朝くらや

木の丸殿をうたふあけぼの

〇朝 倉 山

にや。上座下座をすべて朝くらと云は、此邊の山の名 麻氐良山より北、黒蘇八幡宮の上の山、山田村の上 山あり、西の方は朝くらき故に、朝くら山と名づけし によりて名付しなるべし。一所を以て一郡に名付し の山、又菱野、須川の山をも、すべて朝倉山と云傳ふ。 所にかぎらずといふ。朝倉ト名づけしは、此邊東に

視る。衆皆嗟き恠しむとしるせり。此山のことなる 子天皇の喪に奉從して、還て磐瀬の宮に至りたまよ。 朔丁巳、天皇朝倉宮に崩れ給ふ。八月甲子朔、皇太 。 の夕朝倉山の上に鬼在りて、大笠を着て喪儀を臨 ためし多し。日本紀を考るに、齋明天皇七年秋甲午

雲まよりよそに聞こそあはれなれ 俊

成

朝くら山のうぐひすのこゑ

範

とはねども名のりて過ぬほとゝぎす

朝くら山の雲井はるかに

祝 部 成 仲

ほとゝぎす朝倉山のあけ無後展 なのに

とふ人もなき名のりすらしも

爲

里わかぬ名のりなれどもほとゝぎす

朝くら山のたそがれの空

西

行

めづらしな朝倉山の雲井より

したひ出たる赤星の影

家

隆

まだきより秋ぞと名のる黄昏に

朝くら山のよそのまつ風

匡

房

郭公雲井はるかに名のればや

朝く ら山のよそになく りん

後 鳥 羽 院

名乗なり雲井はるかにほとゝぎす

朝倉山 0) たそがれの空

〇千 年 JI]

筑前筑後のさかひにある大河也。 兩國に屬す。 其源

は肥後國小國鄉、 豊後衂玖珠郡より流出て、 日 田郡

且筑後生棄郡の與より出、 此郡志波のわたり

引て るゆへに、専筑前よりたつ。筑後には別に無~。どを打、上座郡志波上寺は、むかひにも筑前の内あ ぎとする所、筑前の内に所々あり。 兩 h 筑前は此川を以てさかひとす。此郡の上寺村は る故 夏秋鰷の多き時、下へ下らしめずして、其上にてあ 其水上數多の所より流出て廣 十間餘、深さ六七尺あり。凡九州第一の大河也と云。 みを打んため、網所とて川向ひ迄竹木を立て、 るはあやまり也で ば 囫 问 至りて、其水勢盛也。 此川水をせきあげて水をとる。 也。 也 に属する故に、漁人も兩國より出て魚をとり あ 田をひたさんために、 **b** 此 筑前の内は上座下座郡の南を流る。 川を千年川と稱せずして、筑後川 川よりこなたには筑後の **猶下流に至りては、わたり六** 5 惠蘇の宿に大堰手をつ 其流れ外る事遠け 筑前筑後 兩國よりあ下座郡林田村にては、 皆是兩國へ 叉筑前に 地なし。 筑後 川よ 慰せ 此 ふせ

〇小 邊 田

45 松 と惠蘇宿の 間にある小村にて、菱野村の枝村也。

にて、 る事、 此 **此邊まで唐船のぼりしを、つなぎたる木なりとて、近** 往來す。 湊と云所あり。 世迄大なる楠の木枯てありしが、明暦二年に朽て倒 に名付しにや。 土民耕作するに、人馬の通行成がたきゆへに、船にて にへたゝる事籔町あり。 湊と云。是皆海邊には甚遠けれど、河舟の集る所也。 なれば、訛りて、をベ田といへるなるべし。是上座 むかしは千年川此邊を流れしと云傳ふ。 る。是を以て見れば、告此邊に千年川流れしと云傳ふ めし多ければ、あやしむにたらず。然ればお 邊にありしなるべし。 今も小 伊賀に戀の凌あり。美浪國洲股川の上、合渡川に 朝倉の關に近き所也。又此邊に唐船木とて、 さもあるべし。陵谷變遷、唐大和、 をべたとは、織面の湊の在し所田と成し故 邊田にちかき所沼在て、半は深田と成る。 おめ田といふべきを、 近江には八十所に湊ありて、 むかし此邊大河流れし故に 湊とは船のあつまる所をい めとへと通音 今は千年川 古今其た めの湊は 郡

あた 所あり。千年川に近し。筑後國生葉郡也、小江、織面、 されば湊は海邊にかぎるべからず。古歌に、朝倉やお 朝倉 の湊 音相近し。おめを訛りて小江といふにや。 むかしは筑 もあらず。又惠蘇の宿朝倉山の河向ひに、小江と云 前筑後一國なりしかば、上座のをべたより馬蘇宿 り、とよめり。あまは海人をいふなれど、凡漁人をも、 めの凌にあびきするあまのめさしにあひにあひにけ 近きあたりに小江、小邊出ある事をしらずして、織面 る あま小舟をよみしかば、 も漁する者多し。初瀬泊瀬にも、萬葉及六帖の歌にすなどの あまと云べし。千年川は大河にて魚多き所なり。 の湊は土佐の海邊にありなんとかけり。 のあたりには、織面の湊と云所なきよしこたふ。 といひしにや。 り、向ひの小江の邊迄船のつく所を、すべて織面 篤信昔年

筑前名

寄をあらはせし時、 面の湊も、藻鹽草等に載たるごとく、筑前な かつて土佐の人に尋ねし 此邊にあまをよむまじきに 此比此二所 朝倉に

所は、 へる る 事を見聞して、 我があやまりなる事を悔い侍 あ やまらざる事を信じ、且 古書に織面の湊筑前に 30 筑前名寄に載る あ h

0,须 川龙 村

木丸 事の社、山の側にあり。 かし 高産靈なるよし、 祉 はんとて、 須川村の の神、是朝倉の社を彼山上に移せしにや。いぶ 一州の山王二十一社の内に、大行事の社あり。そ かしは菅生と書しを、 の事にや。 御祉あり、 は宮野に屬せしが、 社に近き平田ならば、 の在し處、今土民の云傳ふる須川村 山をも朝倉山と云。 内志賀と

云所に

清水の出る

池あ 朝倉の社の木を剒除たまふとあるは、此き平田ならば、齋明天皇行宮を作らせ給 九月十四 南に向へ 慈鎮和尚審鎭要記に出たり。 一日祭あ り。祭る所の神則志賀三座也。 祭る所の神は瓊々杵尊也。 近世分ちて兩村とす。 近代改て須川と稱す。 **b** 叉右にいひし左右良山 土民は此邊の東北 90 0 カゝ 大行 大行 叉む n

窟 尾 此 長者 と云枝 其所の圃の字をも八並と云。礎石猶殘 須川村の北に廣圃あり。 地 西の方に流れ行、宮野、南林寺の東に 延寶六年の比築けり。又此村上に古き塚甚多 址 ある に産する苧の性すぐれて良。故に人多 なれり。やけたる米の石となれるは、他國にも し富人也。 朝閣寺 の東、 村の境内に大塘あり。 は小石まじれり。肥地にはあらず。 もあ 小村也。昔此所に天降山朝闇寺と云し寺あり。今 跡 南 村あり、 á) b o 90 0 大行事の社の南にあり。 へるは、いつの比にや、 方をほれば口あり。 今も其宅の跡に猶焼たる米出づ。 此村の事既に右に記せり。 毘 須川村の北の山をこえて、 山谷の間に民家多くあり。其谷水 沙門堂令もあり。 此所八並長者が宅 水面長さ百間許、甚だ深し。 窟屋也。 むか ○猿澤池 花園 此 < いづ。 須 n 山間に 河の 9, 所 是を買。其 其内大な Ш 12 0) く相並 境 皇居 皆石 居 此谷中 花園 此 あ 址 山きん 也。 内に 八並 は 山 h

あり。 權現 山 村の枝村に小西と云所有。四方に隍を掘廻せり。 神幸の行宮のあともあり。十月十二日祭あり。 今は詳ならず。 本願寺に屬す。 も多く其中にあり。其境内横一町半、長四町ば 下大行事の社の前にあ 廣庭宮の址 是もよしある人の住ける所なるべけれども、 熊野權現なりといふ。むかしは繁榮の祠 邊土には頗福澤なる寺なり。 の北にある山也。 り。四時水たえず。 \bigcirc 萬德寺 眞宗 ○降薬 〇別所 也。 þ 此 西

叉湯隈 大己貴 には湯 宮野 田 村 となる。 入九間ばかりあり 命、少彦名命なるにや。其側に地藏菩薩あり。 の後の山 のありし所あり。其上に湯隈大明神の社あり。 の内にあり。 其湯の出口とて田の中にあり。 の上に石窟あり。 此所むかしは 内の廣さ十疊敷は 温泉在しと云。今 其下段

林

寺

眞言宗

b のロ 育王山と號す。 だ栗師堂建立なかりし時より、鎭座したまへりと 寺佳境也。樂師堂の上に山王權現の社あり。是は 其先に石階あり。是をのぼれば樂師堂にいたる。 門内の左右に僧坊の址多し。今に庵の名殘れり。 是むかしの寺の外門也。此門内に今は民家あり。 安置すべ 出せしが、 本尊の藥師は傳教大師の作にして秘佛也。縁起にし りて、寺をも立けるならん。然に今は樂師ある事を知 て云、もし恙なく歸朝せば、七佛樂師を作 るし侍るは、傳敎大師人唐せんとて、 て、山王ある牛をしらず。凡かやうの事所々に多し **ど入て二町ばかりゆき.又轉じてゆく道に橋あり** 樂師堂のある所も此社の境内也。此社あるに 始 に民家あり。八坂といふ。南林寺は則其奥にあ は大寺なりしと見え、八坂の入口に しと誓ふ。 難風にあひ危かりしかば、心 樂師佛を本尊とす。 然るに風波穩に成て、 宮野村の奥山谷 博多より 中に新 門 恙なく入 供養し あり 門 其 此

と號す。 後に此寺の住持に、 佛告で日、 立て安置す。 屋 失て、上座の長淵にいたる。 唐す。 に尋ね行れけるに、林中に彼の佛あり。其所に寺を 其木を七きだにきり、一の口を斧初にす。 を甘水と號す。川に付て山に上りけるに、白犂等 けるに らば白 白山寺也。にこそ能木はあるべけ 筑紫に下り、 りに、大木一本臥てありけるが、餌谷といふ。 木のふ にて一斧三體して佛を作り終れり。 口より金色の水流れ出けるを見て、是こそと思ひ、 山に行んとて、依井川を渡り、 しに 歸 傳 朝の後、 此水他の水に替り味美な 敎 我は南の林に在と。 • の 弘仁元年四月八日開堂せり。 所の 藥師 開ける寺なれば、 者云けるは、 を作らんとて博多に下向 朝廷に御暇申、 仁能阿闍梨と云僧あり。 傳教夢の告に任せ、長淵 此故に其寺を南林寺 此 Ď 地には 天台宗なる れと云し 宿願をとげん それよ 然るにこの 手水をつかひ 良 夢 白山の か 材 慈本阿 山谷も ば り其水 13 樂師 用木 72 岩 \$ め

に告て日、長淵は千年川の邊にて水災多し。山邊に を引て佛殿を造終る。貞和二年四月八日の事なり。 然るべき所を給はり、寺を改め作らん事を望ける。 座、能時節歸朝せり。此人に寺をゆづるべしとすゝ の廢せん事殘念なり。さらば寺を本首座にゆづらん 小気許しければ、本省座則今の八坂を見立、南林寺 本意にあらずとて肯はず。然れども諸人しゐてする 事ぞあらんとて歸朝し、長淵に着、仁能に對面す。 立翁宗本首座、元朝に至り、七年居たりしが、仁能 めければ、仁能宗旨の改る事は恨也といへども、寺 に落墮す。寺の絕ん事恨多し。たまへ~含弟の本首 めければ、仁能今迄天台宗なりし寺を禪宗に改ん事、 が兩眼より血の泪を流すと夢に見けるが、さては何 仁能跡のたえん事をなげきける。仁能が弟の禪僧、 寺の僧徒及近所の民共集りて云けるは、慈本は已 製に寺を相頼せんとす。慈本出家を嫌ひ、落堕す。 て同心し、宗本に渡しぬ。其後本首座宰府の小式

は、 此佛 友なはんとすれ共、 子美なる事玉の如 下りて此子をつかみ、上座郡長淵村の樂師の 起に の子也、人の子にあらずとて、交るものなかり 夫婦ともに薬師の惠也とて、悅て是をそだ 大木の上に、巢をかけたる所にもて行、其子に のあつき時、庭上に疊をしき、すいませけるに、鷺忽 主忠之公の時、 中 いだき歸り、 んとしけるが、取落しけるを、其ほとりの老翁見付て 代と云者也。 12 與開 めに、 彼子是をほ 日、武藏寺に藤監代と云長者あり。老て子なし。 に耐りけるに、 山立翁宗本よ。曹洞宗 の夢に・ 長淵 本より老に到る迄子なかりけ 命有て眞言宗と成 往て尋ねべしと夢にみる。 の薬師に、百日が間玉の時に参詣す。 いなく思 汝が父は御笠郡の武巌にすめる U カコ 其妻頓て懐胎 72 年幼き時、近所の農民の子と ひ、 へなるわらはべ共、 十三の時實の父母を求 と成る。 30 して子をうむ。 訳なり。 り上線 八坂藥 其の告に てり。 n 。此 汝は ば、 あ 側 餇 9 なる 先國 **の** 夏 緣 則

は、 にう が裁縫したる衣也と云ければ、 者是を信ぜず。 なりとて大に悅び合ひ、 十三年忌 代此子鷲にとられ、死して後十三年に當れりとて の藥師堂を改て建立しけ 任せて、 しうぶ衣を、養父證據の為にあたへしをいだしけれ 彼乳母をよびて見せ つせし事は前に記せり。 養父母に暇乞 y 執行ひける折節なるに、 其時彼子鷲につかまれし時、 (30 けるに、うたが いつくしみける。 行て藤監代に申す 長淵の さてはまことに我子 彼子行ける。 南林寺を今の ひもな 頓て長淵 着た 膝 地 長 盤 h

〇鏡

う 菱野村の内、鳥越 其高三丈、わたりは一尺あり。面は鏡のごとし。 閣寺の北 角ある石也。 いふ。 紀伊國名草郡大野庄幡川村にも鏡石あ の奥にも、鏡石とて如此なる石あり。 石の面は削なせるが如 又席田郡金隈にも鏡石あり。 石 云所に あ 50 高八尺ばかりにて、 し。 其间 京 光 唐上 h 都 る故 O)

泥の中に木を入て田を作る。 ばかりあるべし、その深き事はかり難し。近年は其 せり。是又大なる石のよし見えたり。杜子美が石鏡 にもかゝる事あり。成都記に、石鏡瑩徹如、鏡としる の詩あり。又此村の西に大なる泥田あり。凡一町半

〇鳥 集 院

れり。 は、此村及上大庭也。此村むかしは宮野村に屬して、 むかし鳥集院と云寺在し故に、村の名とす。今に礎殘 一村也しといふ。 いかなる寺なりしにや聞えず。此郡北の境目

○大庭村

間許に、しるしの石とて殘れり。又此村に田に水をと 號す。其太刀を納し所と云傳へ、神前より左の方十 る所の神は則八幡三座なり。九月廿五日祭禮あり。 大庭を枝村とす。上大庭村に太刀八幡の社あり。 いつの比にや、畠山何某太刀を納し故、太刀八幡と 上大庭、下大庭とて兩村あり。上大庭を本村とし、下

萬治 り。夏は極て冷に、冬はあたゝかにして湯のごとし。 る 此郡西の境は、下大庭、 種二あり。 せり。 の始の年よりあ 石成村にも大なる樋あり。 は長九間、 り。短きは延費の 石成村なり。 は長十間 叉所 初 あ 90 の R 12 比 出水あ より きは b

〇長 淵 村

贄に獻せしといふ。 にしへ惠蘇八幡宮の祭禮の時、此地より川蜷を取て、 下大庭にもかやうなる牧あり。 野がひの 子をうむ牧には非ず。農人の耕作のため飼へる馬を 何 より在しとい 和名抄に載る上座七郷の一名也。河原に馬牧四あり。 三は大川 b れも山にはあらず、平地なり。 今も其所 ために晝は爱にはなち、 の中に在て島の如し。 へ り。 地 に樂師堂あり。 村 又河貝子出の池と云池あり。 又此村に八坂の藥師の始の寺地 し事、前に記す。 長淵の牧はいにしへ 是は馬の常に在て、 一は地についけり。 夜は家につなぐ。

b. 衞 とさ 助等 に 印鑰大明神の社あり。 寺社に耐るといへども其験な 病を煩、死 は 惠蘇宮祭禮の 月廿六日まつりをなす。 かたまひて れず。 樂を奏す。 門時に農長社 め ける 王の 此 左 に災あるまじきとの靈夢をかうむり、 P は 神 然るに正保四年の比より、 いぶか 社を改 事あ 男神 每年十一月初 カっ 古 ぬる事、 なる叢洞 ^ 折節、 し。 也。 田 りといへり。 人 同秋の比、猿 別名あり 彌 め 圃をば荒さず。 八九年 作 昔は十二月初午日祭あり。 七 辯才天十五童子の内に なりし h 郎 彼社の祠官此宮に來 と云者 しを、 申 祭る所の神三座、 九月十六日に神事を取 又むかしは十一月初 の自、 の 外りて社に入 間二百 又山王の社 カコ は、神 • Lo 後世浮屠氏 共 神食御酒を供 其比村人古賀太 村中 餘疋 國 12 事 山 君 より給 あり。 に及べ の牛馬俄 とても 王を祭 しかば、村民 b ょ 中と 印鑰童子あ h 明曆元年 卵に 今は九 始 名付 ざるを þ 孞 亷 右は ら 郎左 事を は 12 女

約なり。 祭る事怠らず。 共に死する事なし。其後も猿來る事度々ありと 記し侍りぬ。 よく農業をつとめて放逸ならず。 せり。かくのごとき輩凡民の中に秀たれば、 て子に養はる。 てしばく つしみ忠信をまもる。且正神をたつとび、 今に毎年恒例の神事、及四時に御供をそなへて 頗讀書を好み、 信心をおこしてたうとびける。 神祠に忠を盡せり。 先祖より世々富家なり。 若き時より 〇入地村の農長古賀二右衞門、 略文字をしれり。 是を以衆民をはげま としれり。言行をつ、家風護厚にして儉 是より牛馬 財を費し **今老** ्र

O外喜宫町

皆久喜宮也。 是より南豐後國日田に行大道なり。 又別に本村あり。 は若市村の境内也。 同町にて南北別邑なり。 若市の本村は別にあり。南側 久喜宮町の北 **久喜宮町にも**

O山王社

村の産神なり。 餘彼 るべからず。いぶかし。久喜宮、若市、古賀、寒水四 し奉るといふ。天武の御時、いまだ山王の社の號はあ **外喜宮村にあり。村翁の云傳へには、** 地に鎮座まします。其鶩地在。其後久喜宮村に移 山王社を古賀村の上野と云所に勸請し、 九月十九日祭あり。 天武帝白鳳 三百年

O古 賀 村

にうつ ては 鎌をとぐ故に、とぎ石と號す。 祭あり。又とぎ石と云阩に大なる石あり。上のおも 今も夕月大明神と云。 祉あり。 古賀、寒水兩村なりと雖ども、一村の如くつい **外喜宮村の東にあり。** 青色にして少和なる砥石也。往來の山人、彎刀、 間四方ばかりありて、方なる石也。高四尺ば 此社村に遠ければとて、今は浦山といふ所 ね。然れども夕月に鎮座ましし ' 夕月と云所に、夕月大明神の 其神跳詳ならず。 九月十二日 ける故 け b

〇池 田 村

也。 九 出 社 前 此 禁ず。今は然らず。)同廿七日祭的あり。 り。(古は二月廿三日より廿五日まで、 宗麟耶蘇宗になられし時、 ならず。又把伎の郷に野手の神をもあがむ。大凡筑 産神なり。 をさして云。此所に把伎二所大明神の社あり。把伎の の中にて、 町を立た 72 國 村の枝村に把伎と云所あり。 池田、 舊記文書等悉ほろびて、其故實をうしなへる事 前に市をなす。故に把伎の市と云。然れども 今わづかなる社也。 の内、そのかみ大友家の領分なりし所の神社は、 此内一神は御母のよし、いかなる神にや、神號詳 る當郡 此把伎の社も宗麟に焼れしが、 り。正月朔日初祭あり。 種植の妨なればとて、 祭る所の神四座、二座は男神、二座は女神 穗坂、 の郷の名なり。 **久喜宮などを云。今は池田 祉は川に近し。近年少なる** 把伎の郷 皆火をかけて焼たりしゆ 把伎は源順和名 二月廿五日鎮祭あ いつの時にかあり とは、 後に漸興立 昔は此祭に、 一切音樂謠を 林 0 田 枝村 星

けん、 其外末社四所あり。 此藤をひけば其病いゆるとて、方々より來りて引者 引の神あり。其前に大なる膝あり。喘息を病るもの、い に あり。愚俗のならは 日廿六日鎮祭ありて、翌廿七日に到る。此攝社に息 立つ。され共舊に仍て志波の市をも把伎の市と云。 盛んにせんとて、久喜宮の市をやめて、 日殊市盛也。商人の仕廻成がたければ、三月二三日 毎年二月廿五日より市立初で、同晦日に到る。 到りて市殘るなり。 **外喜宮にうつる。** しなり。今はさのみ人來らず。 又十月廿九日に祭あり。十一 近代栗山大膳、 志波に市を 志波の町を 廿七

0宗 坊 寺

云。 池田村にあり。小松重盛公の創立し給ひし寺なりと 同村なる梅林庵と云禪寺にうつし置侍る。 て秘佛也。 今は亡て其 址 のみ残 n り。本尊は觀音なりしを、 常に閉帳

〇御目が原

給 樣にこしらへける。長政公此塚にのぼりて遠望あり。 右衞門と云者、 は 林 田村 果 田長政公入國 E 近邊を見給 あり。 俄に塚をつき、 小 の後、 塚なり。 はんとしたまひしが、 國中巡見の時、 茶日の 其上に登りて見給ふ か たちの 此所 村人井手新 如 12 b 是

縣吏星凡と書出せしより、 野手とは稱せず。 ま 林 n 依て村人御目が原と名づく。 功皇后 ども ばとて、貞享三年、 しは野手村と云。 田村拜松と云ふ所にあり。 此 けるが、其境地 大友宗麟火をかけて焼か 八幡宮も 穂坂の産神 〇野手八幡宮 左殿玉依姬也。 • なり。 昔時は大社にて侍り 祭る所の神、中殿八幡大神、右殿 もとより星丸共云。長政公の時、 ひきくして、宮所よろしからざ 今の所に移し奉る。 星丸村む 此 大山 邊把伎殿大明神を もつばら星丸と稱して 始は星丸村に n • しゅ 池田、星丸、林 しとかや 神實重器 鎭座まし 6 办 田 3

鳥有となり 啼松 拜松 た許 末 三月田、御供田などいふ所あり。いにしへの祭田なり。 九月十一月初卯祭也。今に星丸村の田の字に、正月田、二月田、 九月廿八月十五日放生會、九月廿五日は恒例の大祭たり。十月初卯祭、十七度の祭とは、正月元日初祭、二月初卯百年祭、三月三日桃花祭。 削て取者多し。 松と云松あり。むかしは此所より彦山を遙拜せ て照し見る時は、 ちばかりにも及ばず。 あり。 神官なり と名付く。されども彦山は見えず。 なる祭を取行ふ。 大山、星丸の五村に猶殘りて、 神幸ありし儀式もなくなりぬ。 j n 是は小兒の夜啼をするに、 し人の末とて十六家、 其の後漸再與ありしか共、昔の 其病愈るとて、 又此社の前なる道の側に 年中七度ありし大祭も絶 諸人其木の側がはる 七祭の日毎に 衪 今もあり。 御旅所の址 此松をとも 田 又其邊に夜 林 に、非 田 to 月廿 T かっ 益 カ> 72 +

ひらか也。 の比良松町 是を夷三郎 故に 良 MJ 殿 街道に松樹あり。 の名を比良松と稱す。 松 と祝ひまつる。 の字を用ゆっ寛文元年より文字を改む屬せり。今は別村となり。むかしは平上下二村、大道にある町なり。宮野村 此夷の 其枝 四邊に 其側に石あ めにう 茂 h 72

し松なるべし。

O 上。 去

村に水田なし。皆圃也。 埋りて田となる。故にむかしは、此村川より北にあ 古川の跡今に在て地ひきし、其地則田となる。 にあるは上寺のみなり。上寺の巽、川上の方に今泉 此郡は千年川を以て境とす。然るに筑前の内、川向ひ 後の方に入こみて、只一村筑前の地有は此故也。 りしが、其後は川の南にあり。筑前の地をはなれ、筑 上寺村の北に新川出來て、もとの川は陸と成り、 にして、上寺村は大川より北にあり。筑前の地につ に土手ありて今に殘れり。むかし此所は千年川の流 三方は皆筑後の内竹野郡也。此村の東南筑後の方に、 村あり。南に千代久村あり。川下の方に小川村あり。 づけり。 の地なりしに、いつの比にかありけん、洪水出し時 年川をこえて向ひにある村也。 故に此邊は川を境として、川の南は皆筑後 河内攝津國の間、淀川の東 筑前と筑後の間 南北 漸

うの所あり。 西にも、 河をこえて、 他國の內に一 村ありて、 カっ

O黒 川 村

あり。 黒川との間、平たけと云山あり。 す。懐中抄に、黒川と人は見るらんすみ染の衣の袖 は大社なりしにや、座主坊の宅址とて、御館と云所 村より上の方には人家なし。岩山と云山あり。彦山 にかゝる泪を、とあるは、此黒川の事にや。佐田と 權現を勸請せし所にて、上宮、下宮などあり。 むかし 谷に出づ。佐田とは別谷也。谷中長しといへども、 佛谷の南にある村也。是又深山幽谷也。 此村に川あり。是を黒川と云。故に村の名と 其谷水は佛

の小石原村

えて、 る村也。 村へ下り大隈町に出る。 秋月の前、 佛谷佐田よりこえても爱に通る。 町あり。又三奈木村より帝釋寺たうげをこ 彌長村より谷間を五里登り行て、 此道は上座下座及西南の近 嘉摩郡 奥にあ

かり前 うる。町より八町ばかり東に役行者堂あり。實済できて近川を過て秋月に出る。此町に木杓子を多く作りて 故に、 獅子の宿のたぐひなり。 柴の宿とて、山伏の宿する所に家一軒あり、 其邊に香水あり。香清堂を立て、 やうやく上りて四里の間は、谷せばく山ふかき所に どの深山寒谷よりも、猶冬は甚寒く雪深し。秋月よ 其地甚高し。四方は皆山也。故に佐田村、實珠山村な 行人たえず。凡此所は四方より上り會する嶺にて、 登りて爰に至る。此地の町を通り、彦山の方にも行 國より上方へ行通路也。 山の山伏修行する所なり。行者堂に行く道の、二町は くにかゝる所はまれなり。 して、小石原に至て、却て頗廣き墳地なり。深 くに長谷を下る。又鼓村の方へも是より下る道ある 深山の中にありて、隱里の如くなる所なれ共、 なる道の傍に花棚あり。山伏の手向する所也。 御輿の松とてあり。 北の方の諸郡よりも此道を 此谷水は塔の瀬に流れ、 観音を安置す。 大友宗 竈門の Ш

在。民月十二町有。石原より一里下に 前落合と云ふ所迄は下り坂也。小石原村の西、 紅葉多き所なり。長谷の紅葉、是彦山十景の一也。 豐 是を拜の松と云。小石原村より彥山下宮迄三里あり。 うの辻と云所、彦山を遙拜する所なり。松の木あり。 の八郎爲朝、 のおくに塔の瀨と云所有。石の塔あり。民俗は鎭西 あり。是より彦山へ行。其下の谷を長谷と云。秋冬は **小石原村より彦山の方豊前の境迄、十一町四十七間** すえ置、腹を切て死ける故、 麟耶蘇の宗となり、彦山を焼れけるが、彦山の衆徒 一老坊、政所坊、龜石坊・神輿を此松の根に舁 母のためにたてられたる塔と云。塔の瀬 松尾の古城あり。古城記にしるす。 御輿の松といへり。 江川

O兄弟 激

也。鎮西九尊嶽と云は、虚舟記錄の内、彦山記の中に、 小石原村の内にあり。 四日白髮嶽 一日御笠嶽 五日兩界嶽 二日眞弓嶽 山伏の所謂、鎭西九尊嶽の一 六日馬見嶽 三日蹇臥嶽

七日三腰嶽 八日不動嶽 九日兄弟嶽也

又實滿の座主よりの書出し有。

公儀へも申上候也。資永元申、十二月廿五日に言上申 候。末永雄舟: 院云、右六峰の事は申傳候。九尊嶺の儀は不存候由: 四薩摩飯態山、五肥前牛尾山、六日向國法華嶺、 申事は傳居、九尊嶺の事は不存候由、六峯と云は 九州九尊嶺の事、寳滿山楞伽院に尋處、九州六峰と 一豐前國彥山、二筑前國竈門山、三豐前國水菩提山、 鉢の内に然云。 楞伽

O 中 野

瓷器にならへり。中野焼と云。 二年より陶工來り住して陶器を作る。 原より十五町あり。兩旁に水山茂れり。此所に天和 とは別の谷也。中野東の谷をおくの陣屋と云。 小石原村の枝村なり。谷水も小石 原に流 肥前伊萬里の る。 實施 小石

〇佐 田 村 太行寺社

深山の内にある村也。 下座郡三奈木村より、 同郡荷

原 ばかりあり。 當と云。今の庄屋は其子孫也。凡村中に安倍氏の者十 **发に流され來りし故、正月の用意なし。** 西國には流されず。若其後裔有て爱に來住しける故、 去ども貞任は東國にて討死し、古今著聞にも、貞任は東 請せし社在。貞任が子りうせんと云人の墓とて在。 三代を現人神に祝ひ、木像十三有。第十三は孫太郎專 名を貞と云。後に佐田と改む。此故に貞任より以來十 云傳には、安倍貞任流されて爱に來住せし故に、村の 路中に佛谷在。三奈木より佐田村へ三里許有。村民路中に佛谷在。三奈木より佐田村へ三里許有。村民 それよりして川に隨てのぼる。其間十六瀬を渡る。其 るに、況や又一里與にあれば、い!閑寂なる境地也。 の本村より一 かくのごとき事跡あるにや。 四五家今に在。又貞任が産神也迚、松島大明神を勸 の内帝釋寺嶺といふ山を越して、此下流の谷に入、 ひて、 さなきだに此邊は極めて山ふかき所な 里上に、田代と云枝村あり。民家三十軒 今に正月年縄年木を用ひずと云。 安倍氏十二月除日に、 其子孫其例

に大行事の社多し。是彦山の末社を祠りし也。 を拾る。 に箸立辯才天の祠あり。彦山に行者、此社の後に箸 佐田と江川の境の山、水浦と云。佐田より小石原 其枝に連理あり。 也。むかしは上座郡も彥山の敷地也しとて、 の内前にしるせり。彥山に大行事の社あり。 いへる安倍十三代の木像も 〇此村に大行事の社あり。大行事の事、此卷 大枝にして愛觀すべ 此社の側に安置せり。 此近村 其末社 右に の道

O 時 山

城と云。 彦山座主を攻し時、座主此山に籠りける故、 宗麟耶蘇宗と成り、多く神州佛寺を燒跡はれし折節、 佐田村にあり。上座郡中にては、いと高き山 也 座主の 大友

〇佛 谷

あ 佐田村の枝村なり。 急流にして河水頗多し。 水頗多し。里の西の入口に通堂佐田より一里下なる狹谷の中に

佛谷 凡此山中清流激湍ありて、景色尤愛觀すべし。佐田 安置す。 にには猶少殘れ 松樹殊に繁れ の内兩旁の高き所に、十五の石像十體、及六地藏を を通る。 て作りて替たりといふ。此佛ある故に佛谷と云也。 の國人通り行く所、他國にありや、いまだきかず。 近年は多く切て、 0 間 横二間竪三間の佛堂あり。 の むかしは木佛なりしが、近年肥前の人、石に かくのごとく佛堂の内を大道にして、 山 900 1 **6** 0 杉も亦交れり。其長きは十七尋あ むかし美材甚多し。國中第一也。 大木まれなり。山上險難の地 往來の人此堂の中 自他 堂

〇穗 坂 村

里。 かっ 上座 二里半あり。 ひ目迄、六町二十三間あり。 又穂坂より把伎の渡を越て、筑後生葉郡吉井 の東南のはしにて、豐後境也。 **外喜宮より穂坂へ** 村より 豐後

〇園山正金寺址

事前 坂 村 U) 後 仓鳥 內 12 再與する人なく、 Ш あ 0) 所に詳に 9 O 是三 しる 原彈正貞吉開基 今は只礎のみ残れ し侍る。 此寺も大友氏 の寺也。 b 其

〇阿蘇大明神

べらしずっ べし。藤七の子藤吉も又父祖の志をついて、善行を好む。庶民の内らず。其外善行多し。藤七は常に讀書を好む。凡民の传秀といひつ諸民の勞にかはりて、公役をつとむ。みづから農業を勤めておこた順世、及藤七具人となり利欲すくなく、慈愛ありて邑民をいたはり、命らさん。藤七は先祖より相傳はりて此村の長たり。其父からさん。 日に 間 阿蘇 Щ 御 穗 あ 坂村 0) 社 祭禮 石 50 Щ は づらし。人 あ 村 といふ。 の産神也。肥後の阿蘇大明神を勸請せしと云。 ď あり。 其内一嶽といふ大岩の内に、 より二十町ばかり山の奥にあり。 則是を神體と崇め侍る。 一なったがないない。 神前に石の鳥居あり。 二線、 三嶽とて、 横三尺、長一 每年二月廿八 の農長藤七と云元祿十四年、此里 V と高き岩 則其所を

O赤 谷

里な 此 村 **b** • 東北 の方 南北 は山を越て に長き谷也。 鼓村に近 いん竹と云所に O 是义山 瀑 ፠ あ b かき

益末、星丸は皆同谷の内にあり。 村に出、千年川に入る。此川を、たのみ川と云。赤谷、 正面にあり。 水流四五間有。 林田は谷間を離れ、廣き所に在村也。 赤谷の水流、益末、星丸村を過、林田 星丸は赤谷の下の

〇福 井

水は、 にある邑也。其下は則豐後境也。寳珠山の水、鼓村の 事一里に及べり。寳珠山の下にあれ共、是又深山の 實珠山の末流にて、同谷の下にある村也。 竇の谷より祝原迄、谷中凡五里あり。 合て、福井に流れ、福井の谷中を過て、豐後國吉井 塚より豐後境迄は、五町四十一間あり。 に流れ、其下、祝原に出て、日田川に入る。 資珠山村の下なる大行事社の前にて、 下福井村一 鼓村の上、 境 一に落 地 長 里 内

O寶珠山村

下にあり。中について寳珠山村此郡の東南 凡上座郡の内、志波より南郷の諸村は、みな山中及山 諸村よりいと奥深き所也。 谷の中長き事一里 0 は

長政公 其周五 あり。 遠僻の所といへども、 異所にかはりて美はし。 他 岩屋権現の右、高き所にあり。 門建立せり。 故に岩屋權現と云。 村より一里谷頭にあり。 寳珠石ある故に村の名とす。古っ棟札あり。**德治年中** 後寬永二十年、 と云文字は見え侍れども、 の人の姓名をしらず。其社頽破せしを、慶長十一年、 田 にことなる佳境 これを蓋へり。其上よりつもれる尺右の如 地あり。 圍 社の上に極て大なる圓岩あり。其下に社あり。 横四間、竪二間あり。拜殿の下に寳珠石あり。 の家臣中間六郎右衞門大江統胤建立す。 高四尺ばかりあり。 民家 末趾七所あり。 忠之公の家臣筑紫四郎右衞門藤原輿 也。 **所々にあり。おく左右の山** 宮作は南向なり。 岩屋山三社権現の 民俗もさほどいやしからず。 村俗は是彥山權現の母神也 福岡より路程十六里、 其餘は漫滅して、 其内熊野權現の社 其上を苫を以てあ 奥の院と號す。 社の下に拜殿 祉あり⁰ の 建る所 形ち、 深山 是又 叉其 此

らし。 其社 云 戯々 柳 け 圓 小石原、實珠山、此七箇村は皆深山幽谷の内に ありて、其内釜の形のごとく大にして、其深さ測 其所に七種の實おちて生じ、やどり木となれる也と 上の に羚羊出る事あ あ して朽たる所ありて、鳥のしわざ、人のしわざにて、 ば 井村 也。 þ 石 Ł 此村の下に大行事の社あり。此村の産靈なり。 此郡南郷の内、 て登 な の前にて寳珠山の川、鼓村の川、一に落合て 高き所に大日堂、穴観音、 に流 建 F 或日、是奇異なりといへども、初其木に空虚に 七種は機樹、銀杏、梭、女貞、子安、みづし、 右の方に本一つにして枝七種の木あり。 bo 窟 り難し。 山伏此宮の事を司どる。此岩屋の邊に稀 れ入る。 の内に社を建 何 b れも大岩の間に 昔は僧坊六區ありしと云。 益末、赤谷、 川上に釜が淵と云淵あ 岩屋權現の祠の下祠に 12 90 あり。 船 叉住吉の 福井、黑川、 地 藏 嶮 U) 小 岨 社 90 15 な あ 今は か る **b** • b o 所 めづ ひ 大 其 厨

ことさら寳珠山村は、 尤山の奥に 在。 此里の枝村敷

十箇所か h

す。 なり。 資珠 þ 高取の陶工を遣はしおかれ、 此村の谷の長さ、寳が谷といふ所より中崎と云川ま に堪たり。鼓の瀧とてあり。此瀑ある故に村の名と 山に立岩多く聳て、作りなせるがごとく、觀賞する り。鼓村と資珠山との間に、たい山とて廣高なる山あ き谷にて、民居所々に多し。別村たるべき所也。 にして、中崎は最下にあり。 で、路程二里半あり。 十九瀬といへども、さほどはなし。實が谷は谷の最上 鼓河内の内、つると云所に、寛文十年、 其形勢うるはし。又鼓と寶珠山との間、 山の枝邑也。 福井村はこの川下にあり。 然れ共谷はことなり。 村 此間にわたり瀬敷十所あり。 まことに深山幽谷の 陶器をやく。今に其所 中崎に石山三所あ 鼓村は尤長 國君より 東

O花 園 瀧

鼓材に花園山あり。其山より流れ出るたきなり。 に小淵あり。 へに花燉瀧と云。水流三間ばか 鼓の瀧とは別也。 りありて美観也。 Ø

〇砥 有勢

此村は又鼓村の枝邑也。礦ある故に、 るにや。又谷の側に岩窟あり。 口廣し。 砥有と名づ 奥は下に深

〇合ご 樂?

境豊 。 前の 實珠山村の枝村也。同村の内、栗木野と云所より合樂 左右は高きがけなり。 に絲が峯あり。 の谷頭に合樂あり。實珠山より合樂迄一里餘。 て、豐後の日田郡鶴河内村の内、鬼田といへる枝村 より又山に登り行けば、其間足ふり岩、三國境、 に越す道あり。共間十町ばかり有。筑前 釋迦嶽.大日嶽あり。此二山は高山也。 峯の上七八間が間、路の廣さ三尺許、 極てあやうし。 其さきに笈つ の山を越え 合樂 其先 筑筑 後前

笙の窟と云所あり。 景言語に述難し。山上嶮路なれば平易に見難し。又笈 笈と貝とを持行事ならず、つりさげて下す。すべて 十人を入るに堪たり。奇區也。此山中に羚羊を産す 此數里の間奇石怪岩ついけり。又林木茂れり。其美 山を越て、 合樂の民家と鬼田の民家と其間四町あり。かやうに の川下は、豐後日田郡鶴河内の枝村鬼田についけり。 と云。合樂は北より南に向へる谷也。北は豐前筑前 り、貝つりと云所、山伏の通るに、道けはしくして、 つり、貝つりより、鼓村の花園の瀧の方にゆく道に、 東は豐後日田郡也。谷川を以て國の界とす。 他國の方にある所他所にも多し。 大岩の下に自然の窟あり。 南

下座郡

此 す。寅卯辰巳は上座郡にさかひ、北は夜須郡につら は狹し。南の方及未申は筑後に隣りて、千年川を境と 郡は筑前の南の端にあり。 郡中に川流て水利多く、土肥て播植しげし。 郡の形東西廣く、

深 山 75 美材繞ならずとい ども ・薪蒸とも

からず。 民俗朴直に して謙遜なり。

和 載る所 此郡 0 郷の名六あり。

立た三き馬智

城き 田t 城と號する有。 背え 木*

今稱する所 0) 此 郡 Ø 村の 名

石し

寺]1] 三奈木村 原 內 村 村 同上 相改建 窪。鳥 村 村 の内を木材

の荷原村

立

出

村

同上

荷

原

村

田

島

村

同 林 桑 原 田 村 村

金 四郎丸村 丸 村

土と

施木

村

の金 内丸 村

畑

村

片

延

村

井

村

鎌

崎

村

小

隈

村

帝釋寺村

城 村 坂

下長田村

長

田

古

江

村

村

八重津村 村 留村と立。 の長田村

倉 園 村

城意鳅公

邊 餐

白 鳥 村 村といふ。古ば白鳥富永

富

永

村

の内島村

中

村

矢野竹村

角の城 枝充力 村 村矢野 竹

德

淵

村

村 中島田村

頓

田

村

木

村

吉

末

古 賀 拜 村 村 秋月領に入。今來春村と書は訛也。 西 鶴 村

秋月領十一 簡村

平 塚 村

牛 鶴 村

屋

永

村

柿 原 村

堤

村

山 見 村

田

代

村

以上五十四村

板

屋

村

中寒水村

小 田 村

横大道村

萩 屋形原村 原 村 の柿 の牛 内原 内軸 村 村

內 原 村 の内見村

〇林田村神社 內 十二 枝村四十二 本村

筑 林 前十九神の内、 田村にあり。 7、美奈宜神社也と、社家の説には、此社の は、此趾則延喜式の所載 むかしより云傳

鵬》 木、 西の えた に 事は、日本紀に見え侍れば、さもありな 此三神、 寄附 依て此所に祭りたまふと云。事代主の神靈告ありし 地廣からず。 の縁起には、神功皇后此所に河貝子をあつ L 鳥居の立し址あり。 **今猶其名のみ殘り** の境内方九町ありしといへども、 神輿御渡あり。 0 り b 下座郡美奈宜神社名神 間は事代主命也と云。今案ずるに、延喜式神名帳 熊襲を欺き亡し給ひし所なる故、 祭る所の神、中間は大己貴命、東間は素盞嗚尊、 林田の八村を官郷と號し、 Ď 延喜式にも本より大肚とある故 長田、八重津、 神功皇后三韓を退治したまふ時冥助あり。 と云。今は神領なし。祭 い にしへ 御休所は上畑村の田 D 秋月長門守の時迄は神領三十町 の總門は上畑村に在 御社より三町ばか 徳でいる とあり。社家又傳へて日、 上の畑中村、 此 今は田に成て其境 は 九 御神を産靈に祭 の中に在。より七 蜷城と云と見 ん 月 þ # 昔は此宮所 めて 宗 しと云 へだて 片延、 像 日 城 꺠 祉

り町 °あ bo 山城の 五位下美奈宜神に從五位上を授たまふよ 遠ければ、林田の社を美奈宜の社といはん事。 以て美奈宜神社と云。 方に h 祉 云傳へし 奈宜村に程遠き所なるを、 山 なるべしと 兩方の說を云蠹させて後、 れば今其是非を決せん事、二社の訟兩、造、具備はり、 は其 田 の方古き證據有やうに聞ゆ。 多し。 b 又此郡美奈宜村栗尾明神の社人は、 三代實録に、 村 間 小野など境内二里餘あり。 口 は あた をきって安に決定すれば、 美奈宜の社なりといへる明證ありや。 はるかに遠し。本州御笠郡國分の邊より いふ。 故に古語にも、偏聴、生/姦とい 却て其ゆゑある事なるべし。且林 り迄を、すべて大野といへる類多し。 **清和天皇貞觀元年正月廿七日** されどいに 今美奈宜と云里より林田迄は むかしより美奈宜神社 能其曲直をきはむべ しへは一邑 されど乂栗尾の社 栗栖野など本邑よ 必道理ちが 一の間廣 栗尾の趾を b_o 妄說 る • 苒 田 ひ 從 0

君子の判斷をまちて、今みだりに決定し難し。

〇貴野大明神

が願する者は海鰮を食せす。 元和の初、肥後國菊池郡貴野村の松尾大明神を、此地 古賀村の内、御社原と云所にあり。 あり。此神瘡瘍を能治し給ふとて、祈願する者多し。 に勸請せし依に、貴野大明神と號す。九月廿九日祭 松尾明神の社也。

〇禮 拜 村

佛樂師を刻彫せんと誓はれしに、からうじて歸朝せ は、 此村中に禮拜橋とて小き石橋あり。 佛像を造るべき材を求し故に、是を禮拜橋といへり。 ず歓喜し、此橋の上にて一步三禮して彼山に登り、 り。平城天皇の御宇、風難にあひし時の祈願を果さ ひ、危かりしときに心中に祈願し、恙なく歸朝せば七 の嶺に、 傳教大師唐土より歸向の時、海上にて風難にあ 朝に申て筑紫に下らる。時に夜須郡古所 あやしき紫雲たなびきければ、傳教斜なら 僧家いひ傳

の相久保川

あり。 所 里俗稱して蘿蔔川と云。其水の盡る所、及水の出る 根盛大なる時は水涸、素蘿蔔なく成ねれば水流る故、 常のごとし。其上下の水流は四時かはらず。 所、十月より水涸て流れず。三月より又水流るゝ事 下より、屋永村の上に到りて、其間十五町ばかりの 秋は、水土中をくいり流れて水な!。 郡莚内村にも、かくの如くなる川あり。近江國にも亦 三奈木を通て煖に至る。其流頗大也。 相久保村にあり。其源は上座郡佐田山及黑川より出、 倶に水のもるべき穴なし。 奥州會津の田島郷に水無と云村あり。 奇異なる事也。 此川板屋村の 難なるの 其川夏 糟屋

〇堤 村 大堤十三塚

又此村の大道の側に十三塚あり。 此堤ある故に村の名とす。 此村の下大道の側に大堤あり。 も十三塚と稱す。 其堤を今は切れ堤と云。 西南二方のみあり。 其邊の田畠の名を

りつ 此邊千年川に鸕鷀舟多し。鸕鷀師是に乗て、0長 田 村 をつけて是をもち、流に隨ひて下りし也。今鸕鷀舟に の初よりこれあり。むかしは漁人大なる瓢簞を脊に 鸕或はしづみ或うかぶ。 ざなり。 ども、其繩みだれむすぼるゝ事なし。誠に奇巧なる は漁人二人のる。一人にて鸕鷀を四五頭或六かしら たいまつをもち、左の手に鸕鷀を二三頭或四五頭、繩 下るには、あと先に成て下る。凡舟のはやき事甚し。 八艘三四艘に至る、舟の舳をひとしくして下る。瀨を あまたの鸕とも、左右上下におよぎ行ちがふといへ つけてよりかゝり、水にうかびて、右の手にすゝきの かし舟なくて、およぎてうをつかひし時も、近年舟よ つかふ。是亦右に松明を持、左には鸕繩をとる。 かひ鰷を取る。 かふも、片手指の間に五六の鸕縄をはさみ、其 川は

・
廣き放、 いにしへは此邊鸕鷀舟なし。 銃前より出る舟は、 舟をならぶる事、十艘或七 鸕鷀を 上座の 明曆

上寺、山田、下座の長田のみ。此外にはなし。長田紫 れば、 尤多し。 宵月には月落で後下す。**舟を下さんとする時は、** 潮は長田より下にあり。闇夜には初更より舟を下す。 ところ、上座把伎の渡より下、肩の瀨に至る、肩の またはなち入たれば、 りをともして、其光に底なる魚の見ゆるを、うをあ 人は舟のともに乘て棹をさす。一人は一かたにか **黍てうつかふ事あるを、夜川共う河とも云なり。一** ず。題林愚抄日 夏はやみの比になれば、鷓かひ舟に なき故漁せず。又川下より川上にうをつかふ事成ら ねて畫より舟をひきて上る。月夜にはたいまつの光 なり。鸕のくびに、たなはと云物をつけて、ひかへ おほかれども、むすぼれぬさまに、よくさばくなりと へり。 とかくいりちがひてよくつかふ者は、 筑後よりも所々より出。凡鸕舟にて漁する 城き おのく~水底に入て鰤をくふ うの の tz 册

渡

が、 長 菊池掃部助武俊と小貳太郎賴尙と、此渡にて合戰 ず。水城と書しは、あやまれるにや。 し事、太平記告:に見えたり。御笠郡の水城には非 田村にあり。 の内三城の郷あり。 今は水あせて小川となる。 此 川元和の初の比までは猶大 此川の邊を云なるべし。 建武三年の春 順和名抄に、此 の な りし 比 せ

〇鬼 釜

隔て、南に鬼が城と云所あり。 ばくして竈の如し。 城村の上にあり。 上に城址はなし。 高七八間許なる大岩也。 麓よりは見えず。 鬼のかまより高 是より又谷を 其中間· <

O 矢 竹 村

生ず。 h 此村の枝村、角枝と云所の川の端なる山に、矢箆を 舟をかぃめて入。其奥は頗廣し。 板原と云所の山の側に大穴あり。其口方二 横に入事十丈許にして、 故に村の名をも矢の竹と云にや。此村 其先にせばき所あり。 其穴甚長し。 間 **(**) 奥は ばか 內

亂飛し、面を撲、身にさはりて、人をなやます。其多き 〇帝 釋 寺 嶺 穴なるべし。篤信、むかし字治のおく、喜撰が菴のあとの麓にて、 事數をしらず。穴の上は則山也。穴口の上より百餘 より入時、松明をともして入に、穴中蝙蝠甚多くして 間おく迄の間、其山上を踏めば響あり。 くらくして入者おそるゞ故に、其盡る所をしらず。口 て鬼窟とす。したがふらくは、是いにしへ金を掘 里人是を稱

彦山へ 荷原村の境内也。 ó の通路也。 嶺迄山下より八町許あり。 上座郡佐田、佛谷に越る道にして、

嶺に茶

店あ 筑後國目下にありて甚佳景也。 彦山權現を遙拜する所あ 今は寺は亡て只地巌堂のみ殘れり。又其邊に むかしはこゝに花立山帝釋寺と云寺あり り。凡此嶺より遠く望めば、

田だの 原

町 田 村の西北に曠原あ 東西四五町ば かりあり。 **b** 小田原と號す。 野草、 穀類相雜: 5

あ 平塚の三村の境内也。 り、圃ありて、高平の 地なり。 此原は小田村、一木、

〇くるす塚

小田村の南にあり。是むかし耶蘇の徒を埋めし所也。

〇俊寬僧都墓

筑後の山北村の邊にあり。千年川なり。是皆いぶか 下りし有王が、身をなげし淵とて、筑後と豊後の境、 鹿瀨の庄の淨土寺にありと云。此所には其所緣の者 墓と云。然れ共俊寬が塚は、肥前佐賀の町の西北、 平塚村の南、竹林の中に古墓あり。是を俊寛僧都の ありて、しるしを立しにや。俊寬を尋て硫黄の島に しき事也の

〇對 面 所

云所、方二町ばかりあり。城の如し。 邊の圃には、 大友氏此所にて旗下の諸將に對面せし所と云。 屋永村の乾六町ばかりにあり。 大友家中の諸士の居たりし所とて、宅 三方煌あり。 一方は川也。 本丸と

の址殘れり。此所は大友家の旅館を構し所なるべし。

〇七 天 神

屋永村に天神の社七ヶ所あり。 これを七天神と云。

〇屋 永 村十三家

村のいぬゐの方にあり。此村に熊野三所權現あり。

〇小 隈 村

村のほとりに大なる丸き丘あり。其上塚の如し。 石立り。權現と號す。社はなし。古塚なりや。

O藏 園 村

えて筑前の内にあり。飢世の時かやうに入飢しなる 此村の田地の中に、筑後國小島村の田一町、境をこ べし。今に至て、 しかり。

〇白鳥村 富永村

として、富永村其内に屬せり。 村として、白鳥富永村と稱す。 白鳥村、富永村ついきて二あり。 今は白鳥を本村の名 むかしはすべて一

〇桑 原 村十三塚

中に十三塚三所あり。 桑原村の上の原に あり。 今に十三共にあり。 几

〇三奈木村

睡後 鷗號 れ出。 民宅 す。 嶺を越、佛谷佐田に入り、小石原に上り、 蜷は倭字也。國中第一の大村也。平原の地に 美奈宜と延喜式にはかけり、俗説に、蜷城共かけ 北の方坂を下り、 h 今に至つて相續して領せり。 年中、光之公國中を巡見して、この所に來り給ふ も是より 任わが宅に請じ参らせ、 しが、 初て此村及郡中諸村を賜りて采地とす。其子孫 道なり。西南の他國より此道を通る。又彥山へ の町長し。 **甌鷗家嗣三左衞門一任、父の采地を領す。** 川水頗多し。此村を通り荷原村を過ぎ、帝釋寺 ゆく故、行人絶ず。 今に在。其家士此村及郡中所々に多く在宅 北に川あり。 嘉摩郡桑野大隈町に出で、 餐を奉り奔走す。 上座郡佐田黒川より流 長政の宰臣黑田美作、 腫鷗此村に假宅を立た それ 上方 叉其時 あ 萬 **b** • 時 冶

時、一任あるじまうけして、鸕川を見せ奉る。前後兩 御まし所をまうけて、夜川に鸕舟を下して、うをつか 御慰のため、 度なり。 るとぞ。其後寬文年中、又光之公此所に來り給ひし ふ事を見せ奉る。此御遊いとめづらしく住興ありけ 長田村に近き千年川のほとりに、 假に

〇栗尾大明神

ず。追て考ふべし。臆説をしるす。 奈宜神社是なりといへり。然ども其説いまだ詳なら 三奈木村にあり。社家の説には、延喜式載る所

筑前國續風土記卷之十一